

プロローグ

二〇〇四年一二月にサークル『銀の砂』様に寄稿した『一五年目の記念日』の続編です。

プロローグ代わりに『一五年目の記念日』のあらすじを紹介しておきます。

一五歳になったヒルデガルト・フォン・マリンドルフは父の領地であるマリンドルフ星系から帝都オーディンへ帰って来ます。晴眼帝の名前を戴いた帝都多数の名門の女学院(晴眼帝記念帝国女学院高等部)を受験するためです。幼稚舎から大学までの一貫教育校で、ヒルダも幼稚舎に入学していたのですが、早い時期にマリンドルフ星系へ帰ってしまったのが、そのため、途中編入試験を受けての高等部からの入学となります。

入試は上手いきき、入学を許可されたヒルダですが、名門とは言っても大貴族の令嬢のための花嫁修業学校ではない学校の授業に飽きたりません。そこでローゼンマイヤー学長に上級の授業の履修希望を申し入れますが、許可を得ることはできません。

しかし、ローゼンマイヤー学長は代わりに帝立大学の主催する帝国中史の公開講座の受講を勧め、ヒルダは喜んで従います。父とローゼンマイヤー学長のサポートで受講は問題なく決まりますが、その一方で話題を共有できる友人がないことと授業が彼女が本当に受けたいものではないことに段々と不満といらだちを覚えるようになるヒルダでした。

そんな中、図書館の貸出リストから自分と同じような政治・経済・軍事の原書を借り出している人物の存在を知ったヒルダは、その人物にコンタクトを求めます。余り期待してなかったにもかかわらず、間もなく返ってきた返事はヒルダとのコンタクトを歓迎する内容でした。

CGSWRを名乗るその人物と、ヒルダとの奇妙な交流がこうして始まりました。この物語は、その直後から始まります。

第一章 講座

学校の歴史の教科書を読んでいると、時々、どうしてこんなに歴史をつまらなく書けるのか不思議に思うことがある。

晴眼帝陛下の即位にまつわるエピソードだけでも、帝国史の教科書にはこう書いてある——マクシミリアン・ヨーゼフ二世陛下、別名晴眼帝と称される。叛徒鎮圧部隊派遣に伴う帝都の混乱の収拾での功績で、フリードリヒ三世陛下の二人目の皇子であったマクシミリアン・ヨーゼフ殿下が即位された——とたったそれだけ。ジークリンデ皇后のことも、ミュンツァー司法尚書のことほとんど書いていないし、晴眼帝を継がれたコルネリアス一世陛下の親征のことにしたって——コルネリアス一世陛下御自らが艦隊を指揮あそばされ、叛徒に一大鉄槌を下し給わった……だって!。

大好きな時代だから、それでも教科書を丸暗記するくらい勉強していったのに、試験問題と来たら――

『晴眼帝の正式のお名前と即位の年を回答しなさい』とか、『コルネリアス一世陛下の大親征は帝国暦何年か』だとか……晴眼帝陛下の即位は帝国暦三三七年、大親征は帝国暦三五九年……でも、そんなことを暗記して、回答して、一〇〇点満点もらって何が面白いんだろうと思ってしまった。ひょっとして、私たちが歴史を大嫌いになるような陰謀が立てられているんじゃないかしら……そんなことを言って父にたしなめられたのが中等学校の二年生の時だった。

「そんな陰謀はないよ、ヒルダ」

父の、穏やかに笑いながらの言葉をうる覚えに覚えている。「確かに年代だけを覚えるのは退屈だ。わたしも退屈したよ。今ではほとんど覚えていないくらいだ」

「――だったら……」

「年代というのは物事が起きた順序を整理する記号のようなものだよ、ヒルダ。順序を間違えなければよいし、順序を間違えないためにはある程度、事件の起こった年を正確に覚えていなければならぬ。そう思うことだね。それに、まだ中等学校では歴史そのものを深く学ぶには早すぎるだろうな」

笑いながらも書斎から取ってきてくれたのが、父が少年時代に読んだという歴史小説や、解説書、エッセイだった。

「お前にはまだちょっと難しいかも知れないが……何事もちよっと背伸びしたくらいが手頃な目標にもなるというからね」

そんな言葉と一緒に、最後に渡されたのがミュンツァー司法

尚書の回顧録だった。他の本と違ってディスクではなかった。ちよっと角のすり切れ始めた革表紙の本で、渡されたときのずっしりした重さは今でもはっきりと覚えている。五〇〇ページもあるというのに、表紙には『ミュンツァー回顧録(Ⅰ)』と書かれていたのも。

でも、私はへこたれなかった。へこたれるどころか、躍り上がりたいような気分だったのだ。私はまだ一〇歳を少し過ぎたばかりだった。初めて接した『本物の本』……そう、いわゆる『原典』とか『原書』というたぐいのもの……、それが『ミュンツァー回顧録』だった。

マクシミリアン・ヨーゼフ皇子時代や侍女ジークリンデ―皇后陛下を呼び捨てにするのはいけないと思うけれど、ミュンツァー尚書も彼女を最初はそう呼んでいたらしいから、いいかな?――との出会い、敗軍帝の時代、百日帝から、マクシミリアン・ヨーゼフ二世陛下の治世の始まり。

そして毒で視力をほとんど失った皇帝のために祈るジークリンデ皇后の姿。私が晴眼帝と皇后に憧れることになるすべてのエピソードは、みんなこの回顧録が私に教えてくれたものだった。

ミュンツァー尚書の回顧録を読むのは、『本当に』大変だった。父は、尚書はあまり美文――微かに分かる方ではなくて、文章を無駄に飾り立てることだ――を書く人ではなかったと言う。でも、子供がすらすらと読めるような文章ではあり得ないわけだから、私は何度も父に言葉や言い回しの意味を尋ねた。



「うわ……何、これ？」

受講の願書受理の通知が来て一週間後、一回目の講義が二週間後というある日。

帰宅した私を待っていたのは、あまり大きくはないがすごく重い小包だった。

差出人は帝立大学公開講座事務局。宛先は私。『講座教材』とスタンプの押された包みを開くと、出てきたのは一〇数枚のディスクと同じく一〇数冊の冊子だった。

「これが三ヶ月分？」

学校のテキストはみんなディスク化されている。私はその日の授業に必要な分をPDAにコピーして持っていくけれど、クラスメートのほとんどは全部印刷した『ご本』^{ケイタイ}にして持っている。印刷して好みの装幀をしてくれる専門の業者がいるから、とハンスに勧められたけれど、印刷された紙は重い。それに、ハンスに言わせるとマリィンドルフ伯爵家の体面上、あんまりお粗末な装幀で済ませるわけにも行かないのだと言う。

装幀に凝れば凝るほどどんどん重くなるし、重いからと言ってクラスメートたちがしているように、車から教室まで使用人に運ばせたりしたくないのだ。

そうやって印刷した『ご本』だけれど、一年の授業で使うディスクは一教科で一枚。副読本があっても二枚になることは稀なのに……私の前には、それが一〇数枚。その上に、読むだけである半日はかかりそうな厚い冊子がやっぱり一〇何冊。

『シラバス』と印刷された冊子があったので繰ってみた。

「受講前準備……？」

ディスクは一回の講義毎に一枚。冊子は、講義の対象となった時代を想定して、社会・経済・軍事について考えてくるべきメインテーマ。つまり、宿題だ。でも、この厚さは一体なに？

自慢ではないけれど学校の宿題で悩んだことはない。大体、宿題をやって行かなくても、そんなに咎められることもないのだ。前夜がパーティだったとか、どこそこの侯爵邸をお訪ねしていたとか、とんでもなくなると新無憂宮に伺候していたなんて言い訳が通ってしまう。それでも叱られそうになったら、べそをかいて『だって、お父様が一緒に来なさいって……』なんて父親の名前を出したりしたら、先生たちだってそんなにはきつく叱らない。例外があるとすれば、学長のローゼンマイヤー先生で、宿題をしてこなかった娘は退席させられるらしい。令嬢のクララがそれで落第させられて恥をかいたとか、誰だったかな、そう、ヒルデスハイム伯がすごい剣幕で父に話していたのを聞いたことがある。

そうじゃなくて、一年で一枚でも三分の二は授業が追いつかないのに、この講義は一回四時間ほどでディスク一枚分の内容を消化する……らしい。

「……受講者は教材を消化し、シラバスのテーマに対して十分の考察を終えた上で出席することが期待されています」

なんてこと、一体、こんなものすごい量の教材をどうやって消化したらいいんだろう……（涙）——とは思ったけれど、父にも釘を刺されているのだ。『学校の方はこれまで通りに頑張る

こと。それと、この講座をきちんと修了すること。修了できなかったら、似たような別の講座を受けたいと言っても、私は認めないからね』と。

大丈夫、五〇〇ページで五巻もあったミュンツァー卿の回顧録だって半年で読み終わったんだもの。それにほかの受講者だって条件は同じ。やれるわ、いいえ、やってみせる。

——そうはいってもこういうやり方の講義にはまるで慣れていない私だった。考えても見てほしい。テキストに沿って予習をしていき、学校では先生が教壇で延々としゃべったり、板書したりする内容を一生懸命ノートやPDAに記録する。時々指名されて答えなければならぬけれど、だいたいはテキストに書いてある内容をどれだけ覚えていたかを問われるだけだ。

でも……この教材は——絵や映像がたっぷり入っていると、言っても、本にすれば楽に二〇〇ページを超えるはずの教材をゼロから読み始めていったのではとても二週間で準備ができるはずもない。第一、どう準備しろとも指示されていない。ただ、『十分に考察してきてください』とあるだけだ。それに、翌週からは講義は毎週あるのだ。

ただし、テキストそのものは、読み始めるととても面白かった。

帝国中史はもと私の大好きな時代だ。帝国の辺境に『叛徒』達が現れて、それまで帝国しか銀河系に存在しなかった歴

史が大きく変わった時代だから。何か動き出して、大きく変わっていく、そんなのははらするような感じがとても好きだし、それに何といってもマクシミリアン・ヨーゼフ二世陛下とミュンツァー尚書の時代が入っているし。

困ったのは、テキストが読み物として面白すぎたのだ。

読み物として読むのは面白いけれど、これをどうやって『シラバス』に書いてあるようなテーマで考察していけばいいんだろう。まるで見当がつかなかったし、相談する相手も、その頃の私にはいなかったのだ。

前も一度書いていたけれど、私には友人がいない。クラスメートは論外。大学の公開講座を受ける、なんて言った瞬間に、変な生き物でも見たような顔をされてしまう。

親戚の貴族たちも駄目だ。領地が隣り合わせのカストロプ侯爵家には私より少し年上のマクシミリアンがいるし、キュンメル男爵家のハインリッヒは私にとって従弟になる。でも、マクシミリアンは学問にはまるで興味がなさそうだし、ハインリッヒは頭のいい子だけれど身体が弱くて学校にも行っていない。やっぱ一人で何とかするしかないらしいけれど、せっかく帝都に出てきたのに、歴史や社会のまじめな話のできる友達一人できないなんて、一体どういふことなんだろうか。

自分は無茶なことを言っている。
それは分かっていた。

教室での私の周囲半径数百メートルを見回しても、いるのはいわゆる大貴族の令嬢たちばかり。彼女たちの頭の中には、ノイエ・サス・シー新無憂宮での社交界デビューか、若い男の先生の噂話、そうでなかったらパルトネルシヤフトパルトネルシヤフトのことだけだ。

パルトネルシヤフトのことは、公開講座受講の話をした時に一度説明しているけれど、もう一度ちょっと触れておこうと思う。

上級生が下級生を指導し、時には『しごく』——男子校なんかではそう言うらしい——のは普通の学校での仕組みだ。制度化されていないだけのことだ。

私の通う、この学校が特異なのは、そういう上級生が下級生を指導する、あるいは『しごく』仕組みを制度化していることだ。

上級生が特定の下級生を選び、ユンゲレ・シユベステール年下のエルテレ・シユベステールパルトナーとする。その逆も可で、その場合、上級生は年上のパルトナーと呼ばれる。彼女たちは互いを特別の個人的なパルトナーとして、学校生活だけでなく日常生活一般まで指導し、指導される関係を結ぶのだ……と言う。その互いの呼ばれ方から、このパルトネルシヤフトはしばしばシユベステールン・シヤフト姉妹制度とも呼ばれている……らしい。

『可愛くない!』と礼付きな私だったから、全く興味も関心も抱いていなかったのだけれど、驚くなかれ、ユンゲレ・シユベステール私もパルトナーにしたいと言って、訪ねてきた上級生が何人かいたのだ。

最初の一人二人、ひょっとしたらと淡い期待を抱いて、私は自分がしたいこと、今興味のあることを素直に話したのだ。社会を動かしている仕組みや、動かしている人をもっと詳しく知りたい。できるなら、自分も歴史を動かすような立場に立ってみたいし、それができないなら社会がどう変わっていった、どう動いていくかを見通していけるようになりたい。

「学者にでもなるおつもりなの?」

彼女たちの反応は私を失望させた。

「いいえ、研究者にはなりたくないんです」

狭い研究室の中で、背中を丸めて本にかじりついているだけ……というのはとても失礼な言いようだと思うけれど……で、机の上だけで、文章だけで他人とは違うことを見つけ出したこと競い合う、そんな人間になるのは嫌だった。

「宮廷にあがって皇帝陛下のお目にとまりたいんだったら、あまり頭に一杯知識を詰め込まない方がよろしくってよ。皇帝陛下はあまり賢い娘はお好きじゃないそうだし……」

「そうそう、どこかの場末で拾ってきた庶民の娘が大のお気に入りだって」

「自分でお洗濯したり、お菓子を焼いたりするのが得意なんですって」

「いやだわ。そんな下々のするようなことを『得意』だなんて……皇帝陛下のお氣が知れないわ」

私も噂は聞いていた。

グリューネワルト伯爵夫人。名もない帝国騎士の娘で、宮内省の職員が下町で見つけて宮廷へ連れてきたのだとか。

クラスメートたちは彼女のことを良くは言わない。本当なら自分たちが皇帝陛下から寵愛されるはずの存在なのだ、と信じている。どうしてかと言えば、自分たちが身分の高い貴族の出身で、グリューネワルト伯爵夫人は帝国騎士と言っても下町から連れてこられた、言ってみれば庶民と変わらない身分だから。「でも晴眼帝のジークリンデ皇后も、ご自分で銃を持ち歩いて、皇帝陛下をお守り申し上げたって」

そうだ、帝国の歴史で最も優れた皇后と言われるジークリンデ皇后も、もとはマクシミリアン・ヨーゼフ皇子に仕える一介の侍女に過ぎなかった。出自が貴族だったかどうかもはっきりしないけれど、そんなことはどうでもいいと思う。どこで生まれかではなくて、何をしたかで人は評価されることになるのだから。私が歴史に興味を持って、さらに歴史を作っていく社会の動きに惹かれていくのも、歴史がそんな風に人間に対してひどく冷酷な評価しか与えないからなのだ。

「あら、皇帝陛下をお守り申し上げるのは、貴族の神聖な義務ですわ。ジークリンデ皇后陛下はなすべきことをなさったのですもの。『お洗濯』だとか『お菓子作り』は貴族としての義務ではありませんわ」

「それよりも、いかがですの、フロイライン・マリィンドルフ。わたくしからの申し入れ、うけてくださるのかしら？」

「申し上げましたけれど、私は世の中のことを真剣に話し合える方になら、エルテレ・シユベステール年上のパートナーとしてご指導を頂きたいと思っています。舞踏会だとかドレスだとか、宮廷での礼儀作法のお

話には興味がないんです」

「あら、そうなの」

「やっとな私と断っていると気づいたらしい。その上級生は急にむっとした顔になった。」

「よろしいですわ。頭でつかちなばかりで可愛げのかけらもない娘には、わたくしも興味はありません。このお話はなかったことにさせて頂きますわ。よろしくて？」

「はい。お申し出に添えなくて申し訳ありませんけれど」
本当に怒ったらしい。

「……んつとに可愛くない娘ね！」

捨てぜりふは、ぐさつという感じではなかったけれど、ちくちくと私の胸を刺した。

いいもん、可愛くなくなつた。無理に可愛い子の振りをして、私のことだからすぐに化けの皮がはがれてしまふに違いない。いいんだ、可愛くなくなつた。

一生懸命そう思おうとしたけれど、その日の夕食には食欲がなくてハンスを心配させてしまった。

でも、彼女たちはまともな方だった。

その後、二人ばかりの訪問を受けたけれど、一人は彼女が将来宮廷にあがるときにお付きとして新無憂宮に連れて行つてやる……つまり、取り巻きになれということだ……と言ってきた。がさつで可愛くない私じゃああなたの評判を下げちゃいます、

とわざと乱暴な言葉遣いでお引き取りを願った。

極めつけはもう一人。

擬似恋愛関係を結ぼうという申し出だった。

「私にはレスボスの関係なんかに興味はありません！」

怒鳴ってやろうかと思っただけで、さすがに私にもその程度のことは分かっていた。そんな内容^{なかにみ}を大声で叫ぼうものなら、明日から学校にも来られなくなる。

代わりにこう言った。

「私はこの学校に学びにきたんです。恋愛ごっこなんかするつもりはありません」

☆☆☆

わたしが『彼女』^{CGSWR}に会ったのはそんな時だった。

『会った』と言っても直接会ったわけではない。

学校の図書館で借り出そうとした軍事の古書、孫子の帝国語訳^{スン・ツイー}の貸し出し履歴に彼女の名が載っていたのだ。

もちろんプライベート情報だから、履歴に表示される閲覧者の名は略号だったり、ニックネームだったりする。

彼女を示す略号、CGSWRを、わたしは何度も目にした記憶があった。その前に借り出した何冊かの軍事文献と経済学の論文の貸し出し履歴にも同じ略号が入っていたのだ。

見つかる限り、一番古い日付が五年前……最も新しいのが……一〇日前！

つまり『CGSWR』なる人物はまだ帝都に住んでいて、わ

たしと同じような本を借り続けているということになる。図書館の蔵書は学外の研究者や市民にも公開されているから、『CGSWR』は学校の生徒ではなくて、学外の研究者だろうと思った。

私は図書館の管理室に問い合わせを出してコンタクトしてみた。

ダメもとだったけれど、意外なくらい早く返事が返ってきた。『フロイラインCGSWRからは、フロイラインHFVからのコンタクト、政治・経済・軍事一般の話題を歓迎するとの回答がありました。ただし、フロイラインCGSWRは本学の学生ではないので、直接のコンタクトはご遠慮したい。コンタクトは下記宛先によるメールに限定して欲しい旨のコメントがありました』

それが、『彼女』との最初の出会いだった。